

【 復活のトロパリ 第6調 】

てんしのぐんなんぢのはかにあらわれしに、  
 天使 軍 爾 墓 現

ばんぺいしせしもののごとし、マリアはか  
 番兵 死 者 如 墓

にたちて、なんぢのいさぎよきからだをたづね  
 立 爾 潔 體 尋

たあり。なんぢはぢごくにいざなわれず  
 爾 地 獄 誘

して、ぢごくをとりこにし、いのちをた賜  
 地 獄 虜 生 命 賜

もうものとして、しよぢよにあいたまえり。  
 者 處 女 逢 給

しよりふくかつせししゅよ、こうえいは  
 死 復 活 主 光 榮

なんぢにきいす。  
 爾 歸

【 ペチェルスクの聖アントニイのトロパリ 第4調 】

こくしょうなるアントニイよ、なんぢはせぞく  
 克 肖 爾 世 俗

のわづらいをのがれて、よをすつるをも  
 累 遁 世 棄 以

って、ふくいんけいにいえるごとく、ハリストスにし従  
 福 音 經 言 徒

た が あ い 、 てんし と ひ と し き ど せ い を な  
 天 使 均 度 生 為  
 して、アトス せ い ざん の お だ や か な る み な と に い  
 聖 山 隠 湊 到  
 た れ り 。 か し こ よ り し ゃ し ん ぶ の し ゅ く ふ く を  
 彼 處 諸 神 父 祝 福  
 も っ て キー ウ の や ま に き た り て 、 き ん ろ う の  
 以 山 來 勤 勞  
 う ち に い の ち を わ た り て 、 な ん ぢ の き ょ う こ く を  
 中 生 度 爾 郷 國  
 て ら し 、 お お く の し ゅ う ど う し に て ん こ く に  
 照 多 修 道 士 天 國  
 ゆ く み ち を し め し て 、 こ れ を ハ リ ス ト ス に き 來  
 往 路 示 之 來  
 た ら し め た り 。 か れ に わ れ ら の た ま し い  
 彼 我 等 靈  
 を す く わ ん こ と を い の り た ま え 。  
 救 祈 給

【 ペチェルスクの聖アントニイのコンダク 第8調 】

い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。  
 今 何 時 世 世  
 こ く し ょ う し ゃ よ 、 な ん ぢ は よ う し ょ う よ り い っ さ い に  
 克 肖 者 爾 幼 少 一 切



こえて おおく あいせられしかみに おのれを  
超 多 愛 神 己

たてまつりて、かれに たましいを まったくし  
獻 彼 靈 全

て あいをもってしたがえり。よのくつべきも者  
愛 以 順 世 朽 者

のをむ にきして、ちにほらをつくり、  
無 歸 地 洞 造

そのうちにみえざるてきのあくぼうにたいし  
其 中 見 敵 悪 謀 對

てよ くたたかいて、こうめいなるひのご  
善 戦 光 明 日 如

とく ちのしきよくにかがやき、かしこ處  
地 四 極 輝 彼 處

よりたのしみて てんのみやにうつれり。  
樂 天 宮 移

いまてんしらとともにしゅさいのほうざのまえに  
今 天使 等 共 主宰 寶 座 前

たちて、なんちのきおくをとうとむもの  
立 爾 記 憶 尊 者

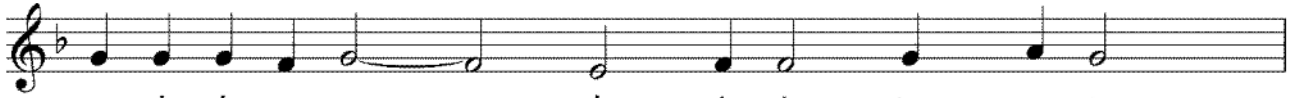
をきねんしたまえ、われらなんちによばんた爲  
記念 給 我 等 爾 呼 爲

めなり、わがしんぷアントニイよ、よろこ  
我 神 父 慶

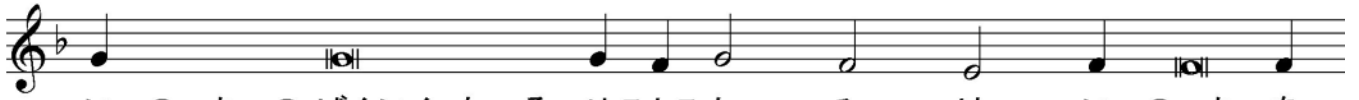


べ。

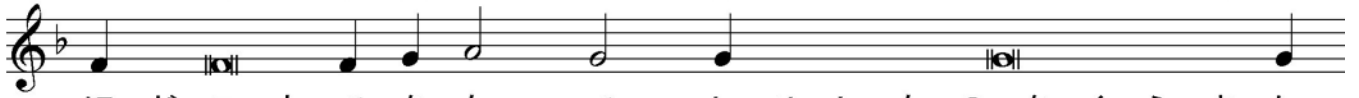
【 復活のコンダク 第6調 】



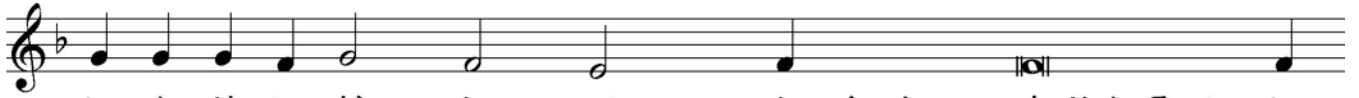
いまもいつうもよよに、アミン。  
今 何時 世世



いのちのげんいたるハリストスかみはいのちを  
生 命 原因 神 命



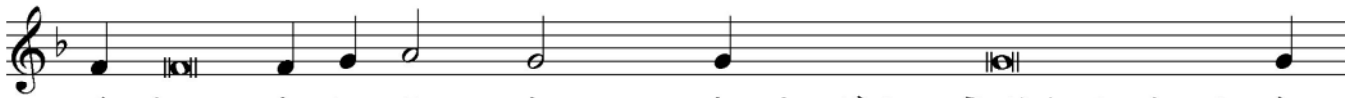
ほどこすてをもつてしせしものをくらきた  
施 手 以 死 者 暗 谷



によりいだして、ふくかつをじんるいに  
出 復 活 人 類



たまえり、しゅうじんのきゅうせいしゅう、ふ  
賜 衆 人 救 世 主 復



くかつといのち、およびしゅうじんのかみな  
活 生 命 及 衆 人 神



ればなあり。

司祭) ( 黙誦： <sup>せい</sup>聖なる神、<sup>かみ</sup>聖者の中に<sup>せいじゃ</sup>息い、<sup>うち</sup>セラフィムより<sup>いこ</sup>聖三の<sup>せいさん</sup>聲を<sup>こえ</sup>以て<sup>もつ</sup>歌<sup>かしよう</sup>頌せられ、

ヘルヴィムより<sup>さんえい</sup>讚<sup>ことごと</sup>榮<sup>てんぐん</sup>せられ、<sup>ふくはい</sup>悉<sup>ばんぶつ</sup>くの<sup>む</sup>天<sup>ゆう</sup>軍より<sup>ゆう</sup>伏<sup>ゆう</sup>拝<sup>ゆう</sup>せられ、<sup>ゆう</sup>萬<sup>ゆう</sup>物<sup>ゆう</sup>を<sup>ゆう</sup>無<sup>ゆう</sup>より<sup>ゆう</sup>有<sup>ゆう</sup>と

なし、<sup>ひと</sup>人<sup>なんぢ</sup>を<sup>ぞう</sup>爾<sup>しょう</sup>の<sup>よ</sup>像<sup>つく</sup>と<sup>なんぢ</sup>肖<sup>もろもろ</sup>とに<sup>たまもの</sup>依<sup>もつ</sup>りて<sup>これ</sup>造<sup>かざ</sup>り、<sup>かざ</sup>爾<sup>かざ</sup>が<sup>かざ</sup>諸<sup>かざ</sup>の<sup>かざ</sup>賜<sup>かざ</sup>を<sup>かざ</sup>以<sup>かざ</sup>て<sup>かざ</sup>之<sup>かざ</sup>を<sup>かざ</sup>飾<sup>かざ</sup>り、

ねが<sup>ねが</sup>もの<sup>ちえ</sup>者に<sup>めいご</sup>智慧<sup>あた</sup>と<sup>つみ</sup>明<sup>おこな</sup>悟<sup>もの</sup>とを<sup>す</sup>與<sup>す</sup>え、<sup>そのすくい</sup>罪<sup>ため</sup>を行<sup>つうかい</sup>う<sup>つうかい</sup>者<sup>つうかい</sup>を<sup>つうかい</sup>棄<sup>つうかい</sup>て<sup>つうかい</sup>ず<sup>つうかい</sup>して、<sup>つうかい</sup>其<sup>つうかい</sup>救<sup>つうかい</sup>の<sup>つうかい</sup>爲<sup>つうかい</sup>に<sup>つうかい</sup>痛<sup>つうかい</sup>悔<sup>つうかい</sup>

を<sup>た</sup>立<sup>われらいや</sup>て、<sup>ふとう</sup>我<sup>なんぢ</sup>等<sup>しょうぼく</sup>卑<sup>こ</sup>しく<sup>とき</sup>して<sup>おい</sup>不<sup>なんぢ</sup>當<sup>せい</sup>なる<sup>せい</sup>爾<sup>せい</sup>の<sup>せい</sup>諸<sup>せい</sup>僕<sup>せい</sup>を、<sup>せい</sup>此<sup>せい</sup>の<sup>せい</sup>時<sup>せい</sup>に<sup>せい</sup>於<sup>せい</sup>ても、<sup>せい</sup>爾<sup>せい</sup>が<sup>せい</sup>聖<sup>せい</sup>な

る<sup>さいだん</sup>祭<sup>こうえい</sup>壇<sup>まえ</sup>の<sup>た</sup>光<sup>なんぢ</sup>榮<sup>とうぜん</sup>の<sup>ふくはい</sup>前<sup>さんえい</sup>に<sup>たてまつ</sup>立<sup>た</sup>ちて、<sup>もの</sup>爾<sup>もの</sup>に<sup>もの</sup>當<sup>もの</sup>然<sup>もの</sup>の<sup>もの</sup>伏<sup>もの</sup>拝<sup>もの</sup>讚<sup>もの</sup>榮<sup>もの</sup>を<sup>もの</sup>奉<sup>もの</sup>る<sup>もの</sup>に<sup>もの</sup>堪<sup>もの</sup>う<sup>もの</sup>る<sup>もの</sup>者<sup>もの</sup>と

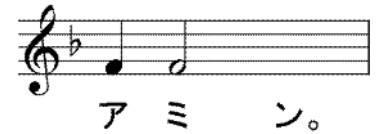
なしし<sup>しゅさい</sup>主<sup>なんぢみづか</sup>宰<sup>われらざいにん</sup>よ、<sup>くち</sup>爾<sup>せいさん</sup>親<sup>うた</sup>ら<sup>う</sup>我<sup>なんぢ</sup>等<sup>じんじ</sup>罪<sup>じんじ</sup>人<sup>じんじ</sup>の<sup>じんじ</sup>口<sup>じんじ</sup>より<sup>じんじ</sup>も<sup>じんじ</sup>聖<sup>じんじ</sup>三<sup>じんじ</sup>の<sup>じんじ</sup>歌<sup>じんじ</sup>を<sup>じんじ</sup>受<sup>じんじ</sup>け、<sup>じんじ</sup>爾<sup>じんじ</sup>の<sup>じんじ</sup>仁<sup>じんじ</sup>慈<sup>じんじ</sup>を

もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ  
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が 靈 と 體 と

せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え せい たま せい  
を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる

しょうしんぢょ こせい なんぢ よろこび な しょうせいじん きとう よ  
生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ  
蓋 我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世  
に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる  
聖 神 聖 勇 毅 聖

じょうせいのもものよ、われらをあわれめ  
常 生 者 我 等 憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい  
聖 神 聖 勇 毅 聖

なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ  
常 生 者 我 等 憐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、  
聖 神 聖 勇 毅

せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ  
聖 常 生 者 我 等 憐

れめよ。こうえいはちちとことせいしん  
光 榮 父 子 聖 神

に き す、 い ま も い つ も よ よ 世 世 に、 ア ミ ン。  
 歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ、 わ れ ら を あ わ  
 聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み、 せ い な る ゆ う  
 聖 神 聖 勇

き、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ、 わ れ ら を  
 毅 聖 常 生 者 我 等

あ わ れ め よ 。

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國  
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、 )

【 提綱 主日第6調 及び 克肖者の第7調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、爾の民を救い、爾の業に福を降し給え、

しゅよ、なんちのたみをすくい、なんちのぎょうに  
 主 爾 民 救 爾 業

ふくをくだしたまえ。  
 福 降 給

誦經) 主よ、我爾に呼ぶ、私の防固よ、我が爲に黙す母れ、

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに  
主 爾 民 救 爾 業  
ふくをくだしたまえ。  
福 降 給 え。

誦經) <sup>せいじん し しゅ め まえ とうと</sup> 聖人の死は主の目の前に 尊し、

せい じ んの しはしゅの めの まえ に とうと  
聖 人 死 主 目 前 尊  
お し。

【 <sup>アポストロス</sup> 使徒經 116 端 ロマ書 15 章 1~7 節 及び 213 端 ガラティヤ書 5 章 22~6 章 2 節 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>せいしと じん たつ しよ よみ</sup> 聖使徒パウエルが 로마人に達する書の讀、

司祭) <sup>つつし き</sup> 謹みて聽くべし、

誦經) <sup>けいてい われらつよ もの つよ もの よわ お おのれ よるこ べ われ</sup> 兄弟よ、我等強き者は強からざる者の弱きを負いて、己を悦ばしむる可からず。我

<sup>らおのおのそのとなり よるこ ぜん もつ そのとく た いた けだし おのれ</sup> 等 各 其 鄰を悦ばしめ、善を以て其徳を建つるを致すべし。蓋ハリストスも己を

<sup>よるこ すなわちしる ごと いわ なんぢ はづかし はづかしめ われ およ</sup> 悦ばしめざりき、乃録されしが如し、云く、爾を辱むる辱は我に及べりと。

<sup>およ むかししる もの みなわれら をし ため しる われら にんたい せいしよ なぐさめ</sup> 凡そ昔録されし者は、皆我等を訓えん爲に録されたり、我等が忍耐と聖書の慰藉と

<sup>もつ のぞみ まも ため ねが にんたい なぐさめ ほどこ かみ なんぢら</sup> を以て望を守らん爲なり。願わくは忍耐と慰藉とを施す神は、爾等にハリストス・

<sup>したが たがい おもい おな たま なんぢら ころろ いつ くち いつ</sup> イスに循いて互に意を同じくすることを賜わん、爾等が心を一にし、口を一に

<sup>かみわ しゅ ちち さんえい ため ゆえ なんぢらあい</sup> して、神我が主イイスス・ハリストスの父を讚榮せん爲なり。故に爾等相納ること、ハ

<sup>かみ こうえい ため なんぢら い ごと</sup> リストスが神の光榮の爲に爾等を納れしが如くせよ。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) わたしたち強い者は、強くない者たちの弱さをになうべきであって、自分だけを喜ばせることをしてはならない。わたしたちひとりびとりは、隣り人の徳を高めるために、その益を図って彼らを喜ばすべきである。キリストさえ、ご自身を喜ばせることはなさらなかった。むしろ「あなた

をそしる者のそしりが、わたしに降りかかった」と書いてあるとおりであった。これまでに書かれた事  
 がら、すべてわたしたちの教のために書かれたのであって、それは聖書の与える忍耐と慰めとによっ  
 て、望みをいだかせるためである。どうか、忍耐と慰めとの神が、あなたがたに、キリスト・イエスに  
 ならって互に同じ思いをいだかせ、こうして、心をついにし、声を合わせて、わたしたちの主イエス・  
 キリストの父なる神をあがめさせて下さるように。こういうわけで、キリストもわたしたちを受けいれ  
 て下さったように、あなたがたも互に受けいれて、神の栄光をあらわすべきである。

\*\*\*\*\*

誦經) 兄弟よ、神の果は仁愛、喜悅、平安、恒忍、仁慈、矜恤、信仰、溫柔、節

制なり。此くの如き者には律法なし。凡そハリストスに屬する者は、肉體を其情及び

慾と共に十字架に釘せり。若し我等神に依りて生きば、亦神に依りて行ふべし。虚榮

を尚び、相怒り、相妒む勿るべし。兄弟よ、若し人過に陥らば、爾等屬神の

者は、溫柔の神を以て、之を規し、且自省みるべし、恐らくは爾も亦誘わ

れん。爾等互に荷を負え、是くの如くしてハリストスの法を盡さん。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制  
 であって、これらを否定する律法はない。キリスト・イエスに属する者は、自分の肉を、その情と欲と  
 共に十字架につけてしまったのである。もしわたしたちが御霊によって生きるのなら、また御霊によっ  
 て進もうではないか。互にいどみ合い、互にねたま合って、虚榮に生きてはならない。兄弟たちよ。も  
 しもある人が罪過に陥っていることがわかったなら、霊の人であるあなたがたは、柔和な心をもって、  
 その人を正しなさい。それと同時に、もしか自分自身も誘惑に陥ることがありはしないかと、反省しな  
 さい。互に重荷を負い合いなさい。そうすれば、あなたがたはキリストの律法を全うするであろう。

\*\*\*\*\*

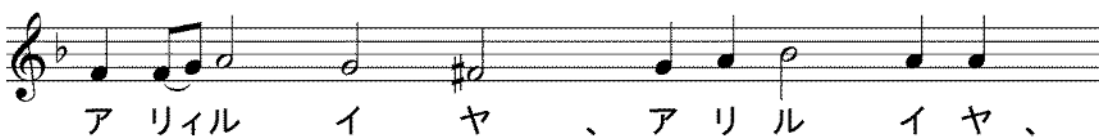
【 アリルイヤ 主日第6調 及び 克肖者の第6調 】

司祭) 爾に平安、

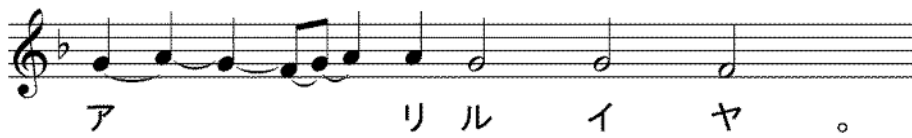
誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) アリルイヤ、

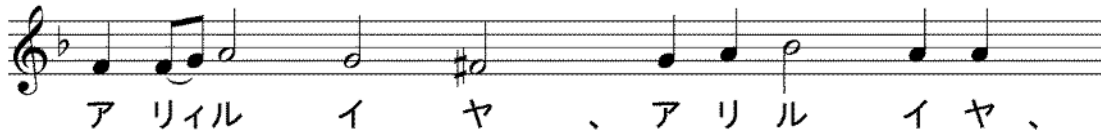






ア リル イ ヤ 。

誦經) 至上者の覆の下に居る者は、全能者の蔭の下に安んず、

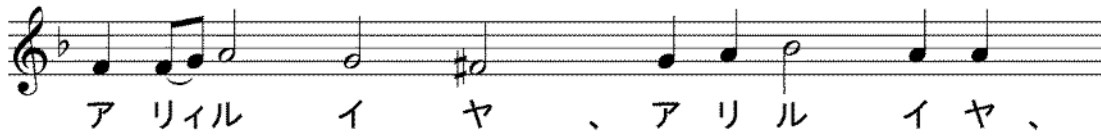


ア リル イ ヤ 、 ア リル イ ヤ 、



ア リル イ ヤ 。

誦經) 神を畏れ、其誠を極めて愛する人は福なり、



ア リル イ ヤ 、 ア リル イ ヤ 、



ア リル イ ヤ 。

司祭) ( 黙誦: 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。 )

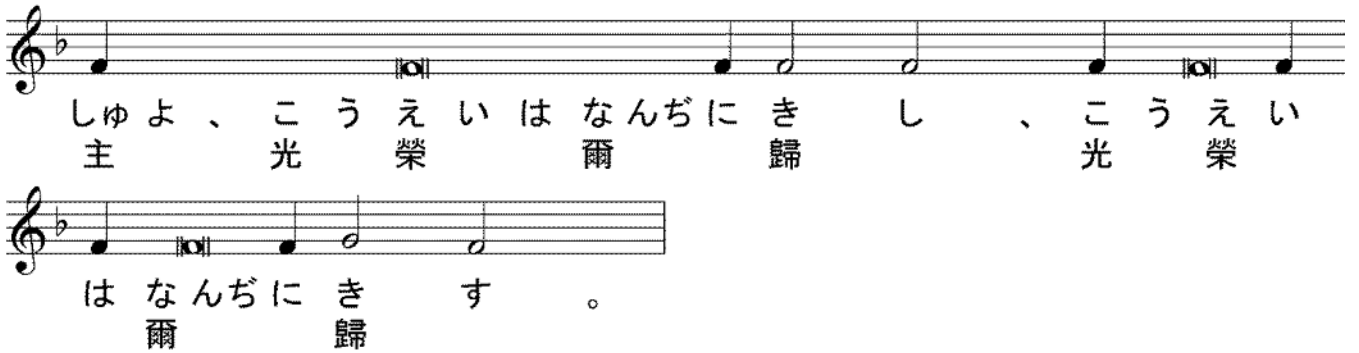
【 エヴァンゲリオン 福音經 マトフェイ福音書33端 9章27~35節 10端 4章25~5章12節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



なんぢのしんにも  
爾 神

司祭) マトフェイ傳の聖福音經の讀、



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
 主 光 榮 爾 歸 光 榮  
 はなんぢにきす。  
 爾 歸

司祭) <sup>つつし</sup>謹 <sup>き</sup>みて<sup>か</sup>聴<sup>とき</sup>くべし、<sup>ゆ</sup>彼の<sup>ふたり</sup>時<sup>めしいかれ</sup>イ<sup>したが</sup>ス<sup>よ</sup>往<sup>い</sup>きしに、<sup>い</sup>二人<sup>い</sup>の<sup>い</sup>瞽<sup>い</sup>者<sup>い</sup>彼<sup>い</sup>に<sup>い</sup>従<sup>い</sup>いて、<sup>い</sup>呼<sup>い</sup>びて<sup>い</sup>曰<sup>い</sup>えり、<sup>い</sup>ダ  
 ヴ<sup>い</sup>イ<sup>い</sup>ド<sup>い</sup>の<sup>い</sup>子<sup>い</sup>イ<sup>い</sup>ス<sup>い</sup>ス<sup>い</sup>よ、<sup>い</sup>我<sup>い</sup>等<sup>い</sup>を<sup>い</sup>憐<sup>い</sup>め<sup>い</sup>。彼<sup>い</sup>家<sup>い</sup>に<sup>い</sup>入<sup>い</sup>りしに、<sup>い</sup>瞽<sup>い</sup>者<sup>い</sup>彼<sup>い</sup>に<sup>い</sup>就<sup>い</sup>けり、<sup>い</sup>イ<sup>い</sup>ス<sup>い</sup>ス<sup>い</sup>之<sup>い</sup>に<sup>い</sup>謂<sup>い</sup>う、  
 我<sup>い</sup>之<sup>い</sup>を<sup>い</sup>成<sup>い</sup>す<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>と<sup>い</sup>を<sup>い</sup>能<sup>い</sup>す<sup>い</sup>と<sup>い</sup>信<sup>い</sup>ず<sup>い</sup>るか、<sup>い</sup>彼<sup>い</sup>等<sup>い</sup>曰<sup>い</sup>く、<sup>い</sup>主<sup>い</sup>よ、<sup>い</sup>然<sup>い</sup>り。是<sup>い</sup>に<sup>い</sup>於<sup>い</sup>て<sup>い</sup>其<sup>い</sup>目<sup>い</sup>に<sup>い</sup>觸<sup>い</sup>れて<sup>い</sup>曰<sup>い</sup>え  
 り、<sup>い</sup>爾<sup>い</sup>等<sup>い</sup>の<sup>い</sup>信<sup>い</sup>の<sup>い</sup>如<sup>い</sup>く<sup>い</sup>爾<sup>い</sup>等<sup>い</sup>に<sup>い</sup>成<sup>い</sup>る<sup>い</sup>べし。其<sup>い</sup>目<sup>い</sup>即<sup>い</sup>啓<sup>い</sup>きたり。イ<sup>い</sup>ス<sup>い</sup>ス<sup>い</sup>厳<sup>い</sup>しく<sup>い</sup>彼<sup>い</sup>等<sup>い</sup>を<sup>い</sup>戒  
 め<sup>い</sup>て<sup>い</sup>曰<sup>い</sup>えり、<sup>い</sup>慎<sup>い</sup>み<sup>い</sup>て<sup>い</sup>人<sup>い</sup>に<sup>い</sup>知<sup>い</sup>らし<sup>い</sup>む<sup>い</sup>る<sup>い</sup>勿<sup>い</sup>れ。然<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>ども<sup>い</sup>彼<sup>い</sup>等<sup>い</sup>出<sup>い</sup>で<sup>い</sup>て、<sup>い</sup>其<sup>い</sup>名<sup>い</sup>を<sup>い</sup>遍<sup>い</sup>く<sup>い</sup>其<sup>い</sup>地<sup>い</sup>に<sup>い</sup>揚<sup>い</sup>げ  
 たり。彼<sup>い</sup>等<sup>い</sup>の<sup>い</sup>出<sup>い</sup>づ<sup>い</sup>る<sup>い</sup>時<sup>い</sup>、<sup>い</sup>視<sup>い</sup>よ、<sup>い</sup>瘡<sup>い</sup>に<sup>い</sup>し<sup>い</sup>て<sup>い</sup>魔<sup>い</sup>鬼<sup>い</sup>に<sup>い</sup>憑<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>る<sup>い</sup>人<sup>い</sup>を<sup>い</sup>イ<sup>い</sup>ス<sup>い</sup>ス<sup>い</sup>に<sup>い</sup>攜<sup>い</sup>え<sup>い</sup>來<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>る<sup>い</sup>あり。魔  
 鬼<sup>い</sup>逐<sup>い</sup>い<sup>い</sup>だ<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>て<sup>い</sup>瘡<sup>い</sup>者<sup>い</sup>言<sup>い</sup>え<sup>い</sup>り。民<sup>い</sup>奇<sup>い</sup>と<sup>い</sup>し<sup>い</sup>て<sup>い</sup>曰<sup>い</sup>え<sup>い</sup>り、<sup>い</sup>イ<sup>い</sup>ズ<sup>い</sup>ラ<sup>い</sup>イ<sup>い</sup>リ<sup>い</sup>の<sup>い</sup>中<sup>い</sup>に<sup>い</sup>未<sup>い</sup>だ<sup>い</sup>是<sup>い</sup>く<sup>い</sup>の<sup>い</sup>如<sup>い</sup>き<sup>い</sup>事<sup>い</sup>あら  
 ざ<sup>い</sup>り<sup>い</sup>き。然<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>ども<sup>い</sup>フ<sup>い</sup>ア<sup>い</sup>リ<sup>い</sup>セ<sup>い</sup>イ<sup>い</sup>等<sup>い</sup>曰<sup>い</sup>え<sup>い</sup>り、<sup>い</sup>彼<sup>い</sup>は<sup>い</sup>魔<sup>い</sup>鬼<sup>い</sup>の<sup>い</sup>魁<sup>い</sup>に<sup>い</sup>藉<sup>い</sup>り<sup>い</sup>て<sup>い</sup>魔<sup>い</sup>鬼<sup>い</sup>を<sup>い</sup>逐<sup>い</sup>い<sup>い</sup>だ<sup>い</sup>す。イ<sup>い</sup>ス<sup>い</sup>ス<sup>い</sup> 遍  
 く<sup>い</sup>邑<sup>い</sup>と<sup>い</sup>村<sup>い</sup>と<sup>い</sup>を<sup>い</sup>巡<sup>い</sup>り<sup>い</sup>て、<sup>い</sup>其<sup>い</sup>諸<sup>い</sup>會<sup>い</sup>堂<sup>い</sup>に<sup>い</sup>於<sup>い</sup>て<sup>い</sup>教<sup>い</sup>を<sup>い</sup>傳<sup>い</sup>え、<sup>い</sup>天<sup>い</sup>國<sup>い</sup>の<sup>い</sup>福<sup>い</sup>音<sup>い</sup>を<sup>い</sup>宣<sup>い</sup>べ、<sup>い</sup>民<sup>い</sup>間<sup>い</sup>の<sup>い</sup>諸  
 の<sup>い</sup>病<sup>い</sup> 諸<sup>い</sup>の<sup>い</sup>疾<sup>い</sup>を<sup>い</sup>醫<sup>い</sup>せ<sup>い</sup>り。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) そこから進んで行かれると、ふたりの盲人が、「ダビデの子よ、わたしたちをあわれんで下さい」と叫びながら、イエスについてきた。そしてイエスが家にはいられると、盲人たちがみもとにきたので、彼らに「わたしにそれができると信じるか」と言われた。彼らは言った、「主よ、信じます」。そこで、イエスは彼らの目にさわって言われた、「あなたがたの信仰どおり、あなたがたの身になるように」。すると彼らの目が開かれた。イエスは彼らをきびしく戒めて言われた、「だれにも知れないように気をつけなさい」。しかし、彼らは出て行って、その地方全体にイエスのことを言いひろめた。彼らが出て行くと、人々は悪霊につかれたおしをイエスのところに連れてきた。すると、悪霊は追い出されて、おしが物を言うようになった。群衆は驚いて、「このようなことがイスラエルの中で見られたことは、これまで一度もなかった」と言った。しかし、パリサイ人たちは言った、「彼は、悪霊どものかしらによって悪霊どもを追い出しているのだ」。イエスは、すべての町々村々を巡り歩いて、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしになった。

\*\*\*\*\*

司祭)彼の時、ガリラヤ、デカポリ、イエルサリム、イウデヤ、イオルダンの外より衆くの民彼に 従 え

り。イスス 群 衆 を見て、山に登れり、既に坐せしに、其 門徒彼に就けり。彼 口を啓きて、

之を教えて曰えり、神の貧しき者は 福 なり、天 國は彼等の有なればなり。泣く者は

福 なり、彼等 慰 を得んとすればなり。温 柔なる者は 福 なり、彼等地を嗣がんとすれ

ばなり。義に飢え 渴く者は 福 なり、彼等飽くを得んとすればなり。矜 恤ある者は 福 なり、

彼等矜 恤を得んとすればなり。心 の清き者は 福 なり、彼等神を見んとすればなり。和 平

を 行 う者は 福 なり、彼等神の子と名づけられんとすればなり。義の爲に窘 逐せらるる者

は 福 なり、天 國は彼等の有なればなり。人 我の爲に爾等を 詬り、窘 逐し、爾等の

事 を 譎りて 諸 の悪しき 言を言わん時は、爾等 福 なり、喜 び 樂めよ、天には

爾等の 賞 多ければなり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ及びヨルダンの向こうから、おびたしい群衆がきてイエスに従った。イエスはこの群衆を見て、山に登り、座につかれると、弟子たちがみもとに近寄ってきた。そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて言われた。「このころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。悲しんでいる人たちは、さいわいである、彼らは慰められるであろう。柔和な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつぐであろう。義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、彼らは飽き足りるようになるであろう。あわれみ深い人たちは、さいわいである、彼らはあわれみを受けるであろう。心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るであろう。平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう。義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。わたしのために人々があなたをののしり、また迫害し、あなたがたに対し偽って様々の悪口を言う時には、あなたがたは、さいわいである。喜び、よろこべ、天においてあなたがたの受ける報いは大きい。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。  
爾 歸

※聖体礼儀③ へ